

## 肩書き

2022. 1. 6

松坂大輔選手が引退した。松坂世代という言葉ができるほどの野球界のスター選手である。甲子園で春夏連覇し、日本のプロ野球でルーキーイヤーから最多勝を3年連続で獲得し、アメリカの大リーグでも活躍した松坂選手ほど、華麗な経歴をもっている選手は他にはいない。

しかし、けがで長期にわたって苦しんだ松坂選手は、2018年に中日ドラゴンズへ入団し、6勝4敗でカムバック賞を受賞している。入団の際には、テストを受け1500万円の年俸で入団している。「俺は大リーグでも活躍したんだ」などと、過去の栄光にものをいわせるようなことは一切していない。

そもそも働くということは、昔、何をやっていたのか、何ができたのかは関係がない。現在の能力と意欲、体力に応じてそれにふさわしい仕事をするというのが世界の常識であろう。だが、日本はそうになっていない。

高齢者の中には、昔は大会社の役員だったなどと過去の栄光にすがったり、昔の部下に使われたくないと不満を漏らしたりする人がいる。教員にも、似たような傾向はないだろうか。

ある方が、平均年齢70代後半というグループで講演をしたときのことである。名刺交換をした中で、3人の方が「元〇〇株式会社常務取締役」などと過去の経歴を書いていて、何か悲しい気持ちになったそうである。ハローワークに行って、自分は昔、大企業の役員だったので、それにふさわしい仕事はありませんかという人が多々いるそうである。

人は、肩書きで生きている側面がある。肩書きがものをいう場合もあるだろう。肩書きが、その人を守ってくれていることもある。そのことに本人が気づいていればいいが、そうでないと、前述のようなことが起きる。

肩書きを取り払ったら、自分はどうなるのか。教員、学校の先生という肩書きが、自分にないとしたら、どうなるのか。どう見られるのか。何ができるのか。こういった視点をもつことは重要である。自己の客観視である。

教員は、狭い社会で生きている。教員でいる間は、まわりがそう見てくれるので助かっている。教員という肩書きを失い、広い世の中に放り出されても、やっていけるだけのスキルや考え方を身に付けなければならない。そうすることが、結局は、魅力的な教員、人物になる道の一つである。幅のある人間になるということである。

肩書きは、いいようでよくない。せめて、勘違いだけはしないようにしたい。常に、肩書きのない自分というものをもっていたい。